
[成果情報名] 小麦のシロトビムシ類に対する農薬の2剤処理による防除効果

[要約] 小麦種子にキヒゲンR2フロアブルとバッサ粉剤30DL、もしくはアドマイヤー水和剤の2剤を処理すると、これら3剤の単用処理に比べて出芽率が向上して防除効果が上がる。

[キーワード] 小麦、シロトビムシ類、薬剤、2剤処理、防除

[担当部署] 病害虫部・病害虫チーム

[連絡先] 092-924-2938

[対象作物] 麦

[専門項目] 病害虫

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

シロトビムシ類に対して防除効果の高いサンサイド水和剤の農薬登録が失効して以来、小麦ではその被害による不出芽圃場が目立つようになり、麦作面積の拡大を推進する中で一つの課題となっていた。現在、3剤が本種に対して農薬登録を有するものの、これらのいずれかを処理しても十分な防除効果が得られない事例が見受けられる。そこで、これら薬剤の防除効果を向上させる使用方法として、2剤処理の効果を明らかにする。

(要望機関名：南筑後普、JA柳川（H22照会）)

[成果の内容・特徴]

1. 播種前の小麦種子にキヒゲンR2フロアブル（乾燥種子重量の2%）の種子塗沫処理を行った後に、バッサ粉剤30DL（同3%）もしくはアドマイヤー水和剤（同0.15%）の種子粉衣処理を行うと、これら3剤を単用で処理した場合に比べて出芽率が向上して防除効果が上がる（表1）。
2. バッサ粉剤30DLとアドマイヤー水和剤の2剤を処理した場合では、上記の組み合わせに比べて出芽率が低く、安定した防除効果が得られない（表1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 「福岡県病害虫・雑草防除の手引き」（<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/d05/tebiki.html>）に掲載し、小麦のシロトビムシ類防除対策の指導資料として活用する。
2. 本成果はシロトビムシ類が激発し、気温が低く出芽に不利な条件下（薬剤無処理区の小麦出芽率数%、1月上旬播種）で試験を実施したため、2剤処理でも出芽率は50%未満となっているが、通常の小麦播種時期での使用であればより高い出芽率の確保が期待できる。

[具体的データ]

表1 激発条件下における小麦のシロトビムシ類に対する2剤処理の防除効果¹⁾

薬剤名 ²⁾	出芽率 ⁴⁾	
	平成24年 ⁵⁾	平成25年 ⁶⁾
キヒゲンR2フロアブル + バッサ粉剤30DL ³⁾	26.4% (8.3)	48.8% (40.7)
キヒゲンR2フロアブル + アドマイヤー水和剤 ³⁾	23.6% (7.4)	37.6% (31.3)
バッサ粉剤30DL + アドマイヤー水和剤	16.4% (5.1)	14.8% (12.3)
バッサ粉剤30DL	12.0% (3.8)	24.4% (20.3)
アドマイヤー水和剤	7.2% (2.3)	13.2% (11.0)
キヒゲンR2フロアブル	3.6% (1.1)	18.8% (15.7)
無処理	3.2% (1)	1.2% (1)

注) 1. 本試験はシロトビムシ類の被害が発生した圃場で行い、両年とも1月上旬に播種した。

2. 処理方法は平成25年10月現在における農薬登録の内容(処理量、方法)に従った。

3. 先にキヒゲンR2フロアブルの種子塗沫処理を行い、風乾後、バッサ粉剤30DLもしくはアドマイヤー水和剤の種子粉衣処理を行った。

4. ()内の値は無処理区の出芽率を1とした場合の比率。

5. 2月27日調査。

6. 2月15日調査。

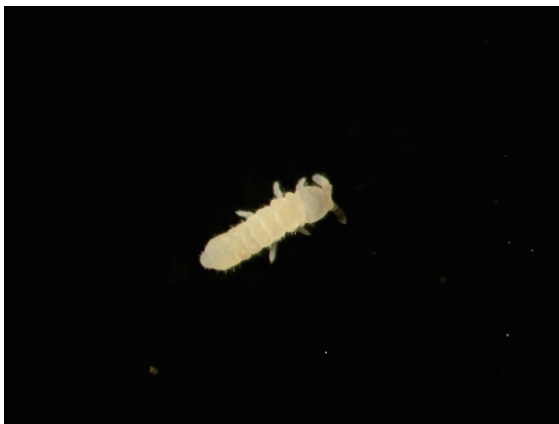


写真1 ヤギシロトビムシ(体長:約2mm)



写真2 シロトビムシ類による被害状況(圃場の手前側が不出芽)

[その他]

研究課題名: 突発病虫害の発生生態と防除対策調査

予算区分: 経常

研究期間: 平成24年(平成23~24年度)

研究担当者: 清水信孝、浦 広幸、石井貴明、嶽本弘之

発表論文等: 九州病虫害研究会報(平成25年)